

主権者及び消費者の育成に係る指導の充実に関する実践研究
令和 6 年度実施報告（概要）

団体名： 福島大学附属小学校

1. 類型

【類型 I ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
(ア. 社会科における指導)

2. 実践校について

実践校名	(ふくしまだいがくふぞくしょうがっこう) 福島大学附属小学校	
全校児童・生徒数	実践研究の対象	
616 人	(学年)	(子ども・生徒数)
	< 1 年目 >	
	第 5 学年	103 人
	第 6 学年	101 人
	< 2 年目 >	
	第 3 学年	103 人
	第 4 学年	103 人

3. 実践校における実践内容

(1) 概要

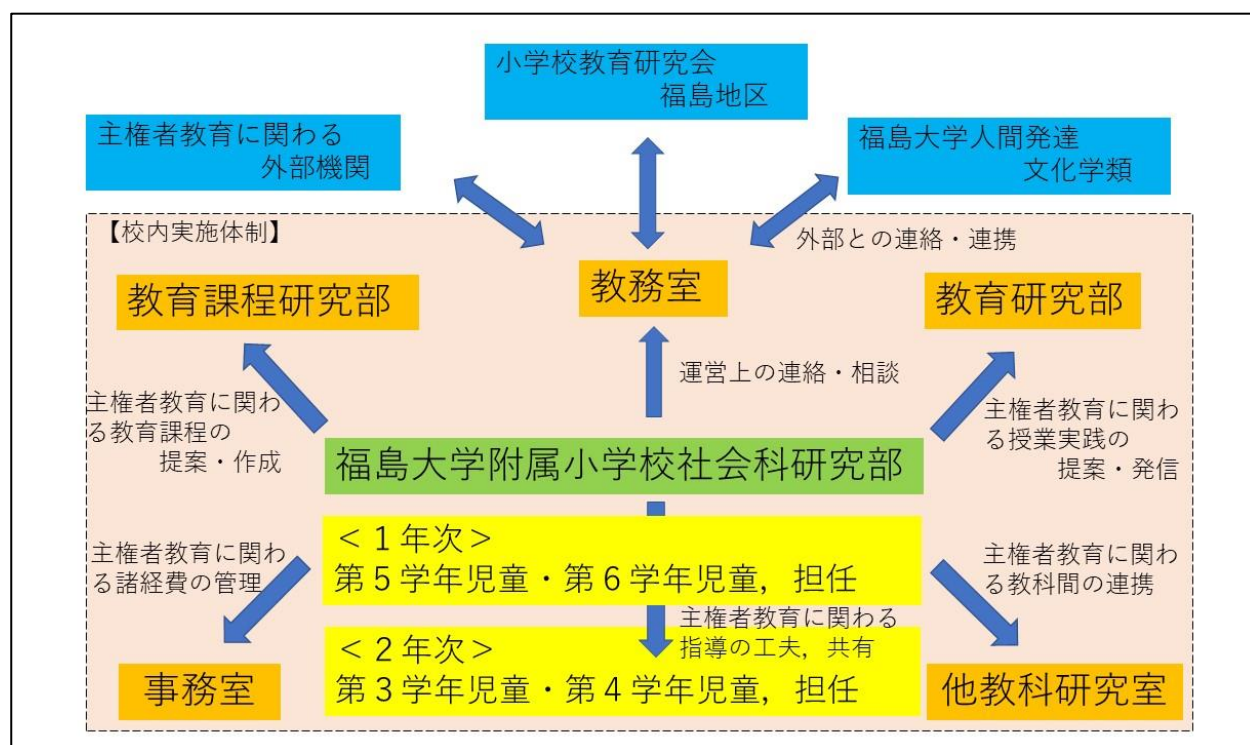
大学や主権者教育アドバイザー等の関係機関との連携体制や校内の専科体制等を組み、1 年目は高学年（第 5、6 学年）の社会科を中心に、我が国の食料生産の諸問題や、グローバル化する社会を考える学習を行った。その際、議論を授業に取り入れるとともに、校外学習や外部人材の活用を図った。2 年目には、1 年目の成果と課題を基に、中学年（第 3、4 学年）での社会科における実践や家庭科や道徳科、特別活動等での実践を行った。

(2) 2 年目(令和 6 年度)の実践内容

2 年目は第 3 学年、第 4 学年を対象に、①主権者として求められる資質・能力を育成するための授業づくり・教育課程づくり、②主権者に関する教育を充実させるための教育体制の整備、③社会的事象を自分事として捉えることができるようにするための校外学習やよりよく選択・判断することができるようにするための外部人材の活用、これらに重点

を置き、実践に当たった。第3学年では「安全な暮らしを守る人々とわたしたち」、第4学年では「健康や環境を支える人々とわたしたち」の単元で、よりよい社会を構想する人々を通して学習を進め、それらの人々と話し合い、よりよい社会への関わり方を考えられるようにした。その際、「社会生活を営む上で大切な法やきまり」を意識して学習が進められるようにするとともに、系統性や教科等横断的な視点を意識して授業を実践した。それらの成果を検証するため、学習前後にアンケートを取り、児童の変容を追った。

4. 実践校における実施体制



5. 各研究テーマについて、2年目の実践を踏まえた成果等

**【類型Ⅰ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
(ア. 社会科における指導)**

＜児童生徒が社会的事象に興味・関心を持ち、自分事として捉えながら、児童生徒に考えさせる教育活動を行うため、どのような指導上の工夫が考えられるか。＞

社会で実際に起きている事柄に出合い、それらを自分とのつながりの中で捉えるために、くらしの中にあるものを教材化したり、自分の生活を振り返り、社会の実態を客観的に捉えることができるようにしたりしたことが「自分と社会とはつながっている」という意識の涵養につながった。単元で「社会に見られる課題」や「よりよい社会を構想する人々の働き」等と効果的に出合わせることで「自分たちにも協力できることはないか」という新たな問いの創出につながり、社会への関わり方を考えたり、選択・判断したりするための原動力となった。しかし、高学年になるにしたがい、社会に見られる課題の解決の難しさから「地域や社会の問題を自分が大人になって解決したい」という点

で消極的になる傾向が見られたり、「地域や社会をよくするために、何をすべきかを考える」ことについて二極化が見られたりしたため、発達段階を考慮した出合わせ方が求められる。

＜発達の段階に応じた情報活用能力の育成(特に、社会的事象に関する情報を収集し、その情報を公正に判断し、自分の意見をもつこと)に関して、どのような指導上の工夫が考えられるか。＞

「調べる」段階において、調査・見学を位置付け、情報を収集することが効果的であるが、発達段階や学校の実態に応じて、例えば高学年における ZOOM を活用したインタビュー調査や、データ上で白地図にまとめ、分布を読み取る活動等、ICT を活用することで、より効果的に情報を収集することができた。

「いかす」段階において、単元で出会った「よりよい社会を構想する人々」とともに、自分にできることを考えたり、選択・判断したり、社会の発展を考えたりしたことが、地域や社会に見られる課題を意識した公正な判断やよりよい意見の創出につながった。その結果、子どもたちの「これからの社会がよくなると思う話し合いをしている」という実感につながった。高学年においては、複数の立場から考えられるように単元を設計したり、話し合いのコーディネートをしたりしたことで、「いろいろな人の立場に立って、問題を解決している」という意識の涵養につながった。

＜教科等横断的な学習を充実するために、教育課程の編成に当たってどのような工夫が考えられるか。＞

第3学年では、社会科と特別の教科道徳において資質・能力（態度）のつながり、第4学年では、社会科と特別活動において活動（話し合い）や内容（学級活動（3））のつながり、第5学年では、社会科と家庭科において内容（食料）のつながりを意識して授業をおこなった。また、第6学年では、社会科の考えを国語科で意見文にまとめる授業をおこなった。家庭科、特別の教科道徳、特別活動等を担当する教員と推進委員会を編成し、協力して授業づくりをしたことで、各教科等の関連を意識して主権者として求められる資質・能力の育成に当たることができた。話し合い等「活動としての関連」においては、年間を通して関連を図ることが可能であったが、「内容としての関連」「資質・能力としての関連」については、発達段階に合わせて内容の順序性が存在する教科等もある上、教科特性も大きいことから、内容や資質・能力のつながりを意識して授業づくりを行うことが有効であり、教育課程編成に際しては、無理のない範囲で内容の順序を入れ替えたり、教科等を横断した校外学習を設定したりする等、工夫して改編した。



写真【推進委員による授業実践（特別の教科道徳）】



写真【教科等を横断した校外学習（社会科・家庭科）】

主権者及び消費者の育成に係る指導の充実に関する実践研究
令和 6 年度実施報告（実践校における実践内容の詳細）

団体名： 福島大学附属小学校

1. 類型

【類型 I ①】主権者に必要な資質・能力の育成に係る小学校又は中学校における実践
（ア. 社会科における指導）

2. 実践校名

福島大学附属小学校

3. 実践校における令和 6 年度の実践内容

第 3 学年 授業実践①

単元名 「安全なくらしを守る人々とわたしたち～福島市を火事から守れ！～」

学習指導要領上の位置付け 学習指導要領社会編 第 3 章 第 1 節 2 第 3 学年の内容（3）

単元内の位置付け

社会科の学習が始まり、自分たちにできることを考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする最初の単元であることを踏まえ、火災に関して社会で実際に起きている事柄と出会い、追究する中で火災から地域の安全なくらしを守る人々の働きに触れることで、協力の必要性を見いだせるようにした。そして、学んだことを生かし、社会を構想する人々と共に、よりよい関わり方を考えられるよう右のように単元を構想した。

時間	単元の指導計画 「火事から安全なくらしを守るために、 だれがどのような取組をしているのかな？」	
	社会科	関連付けた他教科等
1.2	学習問題をつくり、予想を基に学習計画を立てる。	
3.4	校舎内外の消防施設・設備を調べ、白地図にまとめる。	特別の教科 道徳
5.6	福島消防署を見学し、消防署や関係機関の働きを調べる。	
7	少年消防クラブや「消防体験フェア」の資料から、地域の人々との協力について調べる。	
8	学習を振り返り、さらに調べることについて話し合う。	
9	消防団屯所を見学し、地域の人々との協力について調べる。	
10	火事から安全なくらしを守るための働きをまとめる。	
11	自分たちに協力できることについて話し合う。	特別の教科 道徳

○ 社会的事象に興味・関心をもち、自分事として捉えることができるようにするための工夫

福島消防署や消防団屯所を見学・調査する際、大変だと感じていることや困っていることを意図的に話していただくようにし、地域の人々へ協力してほしいことを捉える活動を取り入れた。また、消防本部と地域の人々とが協力して防火に努める少年消防クラ

ブの取り組みや消防体験フェアを教材として取り上げることで、子どもであっても地域社会の一員として協力できることがあることに気付くことができるようにした。



写真【消防団の働きを調査する様子】



写真【少年消防クラブへのインタビュー】

○ 社会的事象に関する情報を収集し、その情報を公正に判断し、自分の意見をもつための工夫

「調べる」段階において、地域の消防施設・設備を見学・調査する際には、タブレット端末上で位置をまとめ、分布を読み取ることができるようにした。消防署や消防団屯所を見学・調査する際には、消防署員や消防団員から直接話を聞く活動を位置付けるとともに、見学が難しいところについては、事前の取材を基に、教科書のようにまとめた資料や撮影した動画等を活用して、情報を収集できるようにした。

「いかす」段階において、見学・調査を通して調べたことを基に、自分たちに協力できることを考える場面を位置付け、消防本部予防課の方と一緒に話し合うとともに、保護者にとった家庭の防火状況に関するアンケート結果を提示することで、社会に見られる課題に対して公正な判断をし、自分の意見をもつことができるようにした。



写真【消防施設・設備を調査する様子】



写真【消防本部の方を交えて話し合う様子】

○ 教科等横断的な学習を充実させるための、教育課程の編成上の工夫

社会科の第3学年内容（3）で取り扱うことになっている「法やきまり」について、特別の教科道徳「C 主として集団や社会との関わりに関すること 12『規則の遵守』」に関する授業を社会科の学習後に位置付けることで、社会科の「法やきまり」についての理解を補充、深化、統合し、規則を遵守しようとする態度を養うことができるようにした。



写真【社会科で「法やきまり」について話す様子】



写真【特別の教科道徳で「規則の遵守」を考える様子】

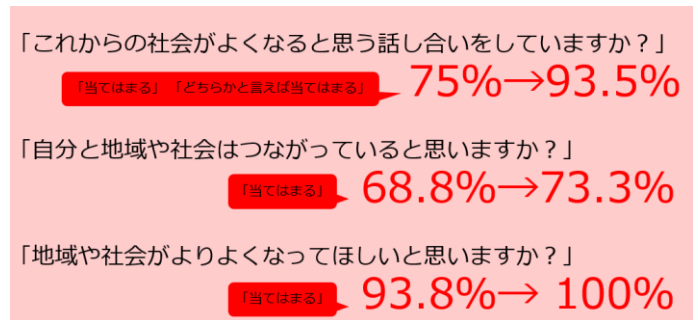
指導後の児童の変容

○ 態度面での変容

実践前後には「よりよい社会の実現を視野に、課題を主体的に解決しようとする態度に関するアンケート」を実施した。第3学年の成果として、「これからの社会がよくなると思う話し合いをしていますか？」という質問に対し、「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童の割合が、75%から93.5%に増加した。また「自分と地域や社会はつながっていると思いますか？」という質問に対し、「当てはまる」と回答した児童の割合が、68.8%から73.3%に増加した。「地域や社会がよりよくなってほしいと思いますか？」という質問に対しては、「当てはまる」と回答した児童の割合が、93.8%から100%へと増加した。



写真【アンケートに答える様子】



資料【アンケート結果（3年）】

○ 行動面での変容

学習後も消防本部と連携して、わたしたちに協力できることを行動に移す子どもたちの姿が見られた。7月末に行われた「ふくしま防災フェア」では、消防本部のスタッフとして、消火器の使い方を地域の方に説明したり、けむり体験の説明や補助をしたりする活動を行った。また、家族に呼びかけて、一緒に体験に参加する児童も多くいた。

消防団屯所を見学・調査した際に、防火ポスターの取組を知った子どもたちは、防火ポスターでの呼びかけを検討し始め、今年度から防火ポスターコンクールに参加できるよう交渉し、防火ポスターを作成した。その中には、リチウムイオン電池の捨て方や火災報知器の点検を呼びかけるポスターもあり、学習したことを生かす姿が見られた。そ

の後、11月には消防本部と連携し、防災ヘリコプターで防火を呼びかける活動を行った。運動会の休憩中に小学校の上空を旋回し、子どもたちや保護者に、協力を呼びかけた。12月には、バスケットボール公式戦に合わせて、消防本部のスタッフとして来場者へチラシを配り、火災報知器の設置・点検を呼びかけた。



写真【「ふくしま防災フェア」の様子】



写真【公式戦に合わせてチラシを配付する様子】

第4学年 授業実践②

単元名 「健康や環境を支える人々とわたしたち～福島市をきれいなまち～」

学習指導要領上の位置付け 学習指導要領社会編 第3章 第2節 2 第3学年の内容（2）

単元内の位置付け

自分と社会とのつながりを実感できるようにすることが主権者として求められる資質・能力の育成に特に重要だと考えた。単元を通して、よりよい社会を構想する人々の働きや思いに触れながら、自分とのつながりを意識して単元の学習を進めた。単元終末には、社会に見られる課題の解決に向けて自分の考えをもち、社会への関わり方を選択・判断できるよう、右のように単元を構想した。

時間	単元の指導計画 「わたしたちの生活環境を守るために、収集されたごみは、どのように処理されていくのかな？」	
	社会科	関連付けた他教科等
1.2	学習問題をつくり、予想を基に学習計画を立てる。	
3～5	クリーンセンターを見学し、処理の仕組みを調べる。	
6.7	粗大ごみや資源物の再利用の仕組みを調べる。	
8	学習を振り返り、さらに調べることに話し合う。	
9	市がどのように処理を計画・改善してきたかを調べる。	
10	県内外の人々の協力関係について調べる。	
11～12	学習したことをまとめ、廃棄物処理事業の役割を考える。	
13	自分たちに協力できることについて話し合う。	特別活動

指導上の工夫

○ 社会的事象に興味・関心をもち、自分事として捉えることができるようにするための工夫

単元導入で、家庭でのごみ処理に関するアンケートを実施するとともに、日常生活を振り返る活動を通して、自分の生活とごみ問題とをつなげて考えることができるようにした。また単元終末には、廃棄物を処理する事業の学習を通して学んだことを基に、自分の生活を振り返る活動を取り入れたことで、分別をきちんとできていなかったことやごみを無意識に出していたことを自覚できるようにし、ごみ問題を自分事として捉えることができるようにした。

○ 社会的事象に関する情報を収集し、その情報を公正に判断し、自分の意見をもつための工夫

「調べる」段階において、あらかじめクリーンセンターの職員の方に、処理の仕組みや再利用の仕組みを取材する活動を位置付けるとともに、「いかす」段階において、調べたことを基に、自分たちに協力できることを考える活動を位置付けた。その際、ごみ処理の専門家である福島大学経済経営学類の教授を交えて話し合うことで、より公正な判断につながるようにした。



写真【クリーンセンターでの調査の様子】



写真【専門家を交えた話し合いの様子】

○ 教科等横断的な学習を充実させるための、教育課程の編成上の工夫

特別活動で「集団をよりよいものにしたり、社会に主体的に参画したりしていくために、自分自身や他者のよさを生かしながら、集団や社会の問題について把握し、合意形成を図ってよりよい解決策を決め、それに取り組むこと」を意識し、年間を通じて学級活動における話し合いを充実させることで、社会科の授業において、自分の考えを進んで表現したり、友だちの考えを取り入れながら新たな考えを見いだしたりすることができるようにした。また、学級活動「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」の内容との関連を図り、学校生活における係や当番活動等を通して、社会の一員として責任をもって主体的に行動しようとする態度を養ったり、社会参画の意識を醸成したりすることができるようにした。



写真【特別活動での話し合いの様子】

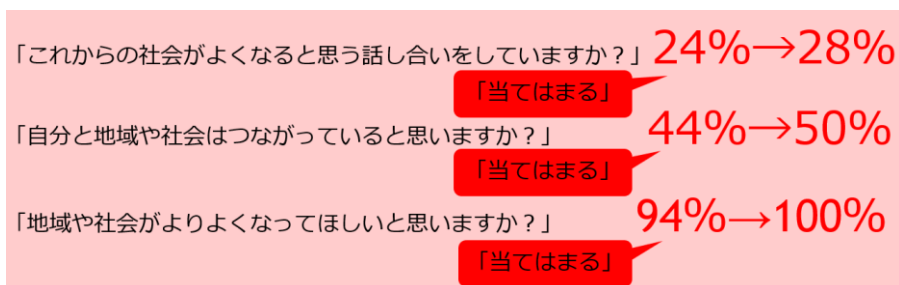


写真【社会科の授業の様子】

指導後の児童の変容

○ 態度面での変容

実践前後には「よりよい社会の実現を視野に、課題を主体的に解決しようとする態度に関するアンケート」を実施した。第4学年の成果として、「これからの社会がよくなると思う話し合いをしていますか？」という質問に対し、「当てはまる」と回答した児童の割合が、24%から28%に増加した。また「自分と地域や社会はつながっていると思いますか？」という質問に対し、「当てはまる」と回答した児童の割合が、44%から50%に増加した。「地域や社会がよりよくなってほしいと思いますか？」という質問に対しては、「当てはまる」と回答した児童の割合が、94%から100%へと増加した。



資料【アンケート結果（4年）】

○ 行動面での変容

「家庭ごみが全国的に見ても多く、分別に協力的でない」という地域の課題に対し、学習後も、自分のくらしとのつながりの中で、わたしたちに協力できることを考えようとする子どもたちの姿が見られた。学習後の11月、福島市ではごみの分別について、「ルールを守らずに出されたごみの開封調査を始める。袋の中のごみから排出した個人や事業者を特定し、悪質であれば氏名や事業所名などを公表する。」等の決定がなされた。そのことを知った子どもたちは、新聞を基に、引き続き自分たちに協力できることを考えようと話し合った。



写真【新聞を基に話し合う様子】